

金丸 雄一

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための予備調査・研究活動

2. 実施場所

佐賀県唐津市（鎮西町・呼子町）

佐賀県東松浦郡玄海町

長崎県壱岐市（郷ノ浦町・石田町・芦辺町）

長崎県対馬市（美津島町・上対馬町・幣原町）

福岡県宗像市（鐘崎地区・大島地区）

3. 実施期日

2020年12月8日（火）～ 2020年12月20日（日）

4. 成果報告

●事業の概要

本事業は、博士論文「日本列島における海士・海女の民族誌的研究」執筆のための予備調査が目的である。報告者は、修士論文にて取り扱った三重県志摩地方以外には、まだ日本列島のアマ漁のある集落の本格的調査をした経験はなかった。博士課程で進めている「環境変動におけるアマの適応」の研究においては、志摩半島など黒潮流路域に対する比較対象との検証が求められる。そこで、対馬海流域のアマ集落のうち玄界灘地方（長崎県・佐賀県・福岡県）の現地調査を計画し実施した。

実施時期の選択としては、漁の最盛期（本格調査期）となる初夏～盛夏よりも前に、繁忙期には聞けぬ話を落ち着いて聞き取りする必要性から12月が最適と判断した。12月は海藻資源のうちアラメ・カジメ類の繁殖（遊走子放出・受精）期直後であり、現地の漁場・種苗生産施設の視察にも適した時期と考えた。また、調査地の3つの県とも11月1日から12月20日までアワビの禁漁期であり、アマへの聞き取りも可能であると考えた。本事業は、2020年12月8日から2020年12月20日にかけて実施した。以下が行程である。

【 調査スケジュールおよび内容 】

<12月8日：移動日（往路）>

<12月9日：移動日／夕刻に現地（佐賀県）に到着>

- ・唐津市近代図書館にて資料収集ののち、調査先との行程打ち合わせ。

<12月10日：唐津市内にて調査>

- ・市内鎮西町の漁場視察と磯焼け状況、生業の聞き取り調査（串浦地区海士1名）。
- ・磯根資源の種苗生産現場見学（佐賀県玄海水産振興センター種苗開発担当係5名）。

- ・*アラメなどコンブ科海藻とアワビ・赤ウニなど貝類の種苗生産工程。
 - ・唐津の実際の海中観察および海岸漂着海藻の収集と分析（玄海海中展望塔）。
- <12月11日：唐津市内・東松浦郡玄海町にて調査／その後、フェリーにて壱岐島へ移動>
- ・市内呼子町での聞き取り調査（呼子港にいた小川島海士／朝市のアワビ売り）。
 - ・ナマコ漁の現場観察（尾の上公園そば海岸でのネリ漁師）。
 - ・海岸線からの漁場視察と海岸漂着海藻の収集と分析（加部島）。
 - ・玄海町立図書館（東松浦郡）にて資料収集の後、唐津市近代図書館にて再調査。
- <12月12日：壱岐島内の調査>
- ・壱岐栽培センター（大島）所長より磯焼け対策の海藻種苗生産の説明を受ける。
 - ・*アラメなどコンブ科海藻とアワビ・赤ウニなど貝類の種苗生産工程の見学も。
 - ・郷ノ浦漁業協同組合にて漁場の磯焼け状況の聞き取り調査。
 - ・海士と組んで磯焼け対策に勤しむNPOに聞き取り調査（石田町ダイバー1名）。
 - ・元 地域おこし協力隊の移住海女からの生業の聞き取り調査（芦辺町八幡浦2名）。
- <12月13日：壱岐島にて調査／その後、フェリーにて本土へ移動>
- ・壱岐市立一支国博物館・石田図書館・「島の図書館」にて郷土資料の閲覧収集。
- <12月14日：宗像市にて調査>
- ・宗像大島にてアマ漁と漁場環境の状況について聞き取り調査（代表理事と海士頭）。
 - ・*漁民みずからアワビの中間育成をしている現場も視察。
 - ・宗像市役所にて水産課職員から港勢調査に基づく水産業全般の現況説明を受ける。
- <12月15日：宗像市にて調査>
- ・宗像漁協（鐘崎本所）にてアマ漁と漁場環境について聞き取り（漁協職員と海士頭）。
 - ・地域おこし協力隊の見習い海女2人と師匠海女の計3名から生業の聞き取り調査。
 - ・「筑前鐘崎海女の像」がある織幡神社（宗像大社境外摂社）の見学。
 - ・鐘崎海水浴場にて漂着海藻（クロメ）の収集と分析。
- <12月16日：宗像市にて調査／その後、博多へ移動／さらにフェリーにて対馬へ移動>
- ・宗像ユリックス図書館（中央館）にて郷土資料の閲覧・収集。
 - ・博多にて水産庁登録の藻場保全専門家2名と打ち合わせ（情報提供と調整）。
- <12月17日：対馬島中部にて調査>
- ・対馬市役所にて水産課職員と打ち合わせと調査先の紹介の確認。
 - ・対馬栽培漁業振興公社にて種苗生産・中間育成施設の概要説明と見学。
 - ・*2名のみでアラメ等コンブ科海藻とアワビ・サザエ・赤ウニ等貝類の種苗生産。
 - ・美津島町鴨居瀬地区にて藻場保全組織の聞き取り調査（代表理事と海士3名）。
 - ・植食性魚類の利活用をみずから展開する海士一家の調査（水産加工店と食堂経営）。
- <12月18日：対馬島北部にて調査／中部に戻り調査>

- ・海士による藻場保全組織と行政（対馬市）の中間支援組織の社団法人の活動調査。
- ・市営施設（上対馬）を漁民自ら買い上げたアワビ増殖施設の現場見学と聞き取り。
- ・美津島町大船越地区にて藻場保全会の聞き取り調査（代表と漁協理事と海士2名）。

＊洋上の実証実験（海藻の種付けと植食性魚類の捕獲）の現場も小船にて視察。

<12月19日：対馬島中部にて調査／南部に移動し調査／フェリーにて本土へ／帰路>

- ・美津島町賀谷地区の海中映像データの提供と説明を受ける（代表の海士1名）。
- ・阿須湾（曲）漁港を訪れ、唯一の海女地区での尋ね歩き調査（地区の老婆たち）。

<12月20日：移動日（帰路）>

●本事業の実施によって得られた成果

本事業によって、玄界灘地方のアマの現況は、以下のような三つの点にまとめられる。

第一に、玄界灘地方では対馬海流のもたらす海水温上昇による漁場環境の悪化が十数年前より始まり、磯根（藻場）生態系の崩壊が起きてアマ漁の水揚げに深刻な影響を与えてきた。そのため藻場の回復に向け積極的に取り組むアマ集団が散見された（「藻場回復型」）。今回は三つの県に跨る地域の調査であったが、アマ集団の中には他県の取組の視察や情報交換などを行い、磯焼け対策の技術導入などに腐心してきた地区もあった。これらは、志摩半島でいま起こっている漁場をめぐる状況とアマ漁民の適応を考える際に有効な情報であった。

第二は、反対にアマ漁民のなかで漁場の崩壊になかば諦めを漂わせる地区も見受けられた。これが、獲物の大幅減少が在来漁法であったアマ漁の継承の危機をもたらしている（「アマ衰退型」）。杵岐の芦辺町八幡浦のアマ集団は、漁場環境の悪化により生業としての収益はもはや期待できる段階ではない。さらに、対馬で唯一の海女の操業があるとされてきた幣原町曲地区では、つい2年前にその伝統が途絶したと目される。

第三に、玄界灘地方では、喪失した藻場の回復のため海藻資源の種苗生産に必死に取り掛かり、同時に獲物であるアワビ・赤ウニなどの増殖にも勤しんでいた（「藻場回復・獲物増殖型」）。前者は生物学的知見が必要となるため県立市立の施設に委ねられているが、後者については漁民みずからも学者顔負けに中間育成技術を磨いている地区が多かった。クロアワビの種苗生産から中間育成（それも完全な親貝となるサイズまで）を、上対馬の引退漁師たちと地元の主婦たちだけで成し遂げていることに、報告者は驚嘆した。志摩半島では県の水産研究所でさえお手上げとなっている課題を、容易く乗り越えているのである。

これらの調査の成果は、日本列島のアマ漁の変容と持続、アマ漁民の適応を研究の対象としている報告者にとって有益である。黒潮の大蛇行がもたらす志摩半島のアマ漁への深刻な被害を考える上でも、対馬海流域との比較が効果的であることが明らかになった。同時に、以上のようなアマにおける3つの対応には、黒潮の大蛇行以外に地域の社会経済変化への地域住民の対応力も無視できないことがわかった。

今後は、黒潮流路域に対する比較対象として、玄界灘地方に連なる①響灘から周防灘にかけての地域、②日本海側の地域（山陰・越前地方のアマ集落）との比較検証をする必要がある。併せて、③

志摩に連なる南部の黒潮流路域（紀伊半島から徳島）もマイクロな比較が必要であり、この方針で博士過程での研究を深めていく所存である。



写真1：ヒジキ中間育成のための生簀を吊った筏。対馬市美津島町の藻場保全会代表
(2020年12月18日 報告者撮影)



写真2：対馬の藻場が豊かであった頃の美津島町で獲れたアワビの貝殻
*海産物販売時の商品説明用サンプル展示。絶滅したマダカアワビもある。
(2020年12月17日 報告者撮影)



写真3：藻場を食い荒らす植食性魚イスズミ — 除去した対馬の海士たちの成果
(2020年12月17日 報告者が保全会メンバーのスマホ画面の記録写真を再撮影)

●本事業について

本事業により博士論文執筆のための予備調査の第一弾を実施することが出来た。事業実施直前に行った総研大文化フォーラム2020での口頭発表内容との比較考察のためのデータを入手でき、今後の研究の方向性に確信が持てた。このような大変貴重な機会をお認めいただいた先生方、実施に向け親身なる支援を賜った事務方の皆さまに深く感謝申し上げます。COVID-19の社会状況下にも拘らず教職員の方々が背中を押してくださったことを胸に刻み、報告者は論文執筆に勤しみたい。今後も学生派遣事業が継続されることを切に望みます。